

所員の自著紹介

小林潔 (外国語学部国際文化交流学科)

Sekiguchi-Grammatik und die Linguistik von heute.

Kennosuke Ezawa, Kiyooki Sato, Harald Weydt (Hrsg.).

Stauffenburg Linguistik, Band 50. Tübingen: Stauffenburg Verlag. Nov., 2009. 142 Seiten.

ISBN 978-3-86057-188-0

関口存男 (1894-1958) のドイツ語文法論に関する研究論文集。ドイツ語及び英語の論考 13 本を収録。2007 年 3 月 22-23 日開催のシンポジウム「関口文法と現代言語学」(主催: 浜松医科大学総合人間科学講座佐藤清昭研究室・東西言語文化研究協会 (ベルリン), 於浜松医科大学) での日独の報告者の加筆修正稿 10 本及び寄稿 3 本の他, 2002 年のコセリウ姫路講演, 関口の略伝・書誌・文例集項目を収める。論文の部は, 1. 世界の言語研究の中での関口文法 (4 本); 2. 関口文法の特徴 (6 本); 3. 関口文法応用の方法論的・教育学的考察 (2 本) の 3 部と日本語言語学テキストの翻訳論 (1 本) からなる。テーマは, 認知言語学, 言語規範研究, 冠詞・前置詞研究, コーパス言語学など, いずれも現代の言語学・応用言語学と関わるものである。

小林は第 3 部に „Sekiguchi-Grammatik und die didaktische Grammatik des Russischen in Japan. [関口文法と日本に於けるロシア語教育文法] “ を掲載, 日本のロシア語学者への関口文法の影響とロシア語教育での応用可能性を論じた。

『留学生派遣から見た近代日中関係史』

大里浩秋・孫安石 編

御茶の水書房 09 年 2 月刊。

日中関係史の研究会や科研費を得て行ってきた共同研究の数年来の成果をまとめて 1 冊にしたもので, 08 年度の科研費出版助成を得て出版することが出来た。

本書は, 題名につけたごとく, 日中相互の留学生派遣の実態を通して近代の日中関係史がいかなるものであったのかを考え, 明らかにすべく努めた作品である。論文篇と資料篇に分けているので, その順に内容を要約する。

論文篇は日本人の中国留学に関する 3 篇と, 中国人の日本留学に関する 6 篇から構成されている。近代以降日本人が中国に留学し始めるのは, 明治初年のことで, 陸軍が中国語の習得と中国事情調査のために若者を派遣しているが, 当時の留学は, 今と違って学校に入って勉強するのではなく, 個人的に中国人教師を探して中国語を学び, あとは独力で中国を歩き回って調査したことをもって留学と称しているのである。その辺の事情に始まって大正, 昭和と外務省や銀行など各種団体が留学生を派遣する状況や, 留学生個人の体験を概括的に述べているのが桑兵論文である。孫安石と大里浩秋の論文は, 前者が明治・大正期を中心に述べているのに対して, 後者は昭和期を扱っているという違いがあるものの, いずれも外務省が中国に留学生を派遣した事情と個別留学生の動きを明らかにするものであり, 次第に緊迫の度を増す対中関係に役立つ外交人材を育てるべく苦心する外務省の派遣内容の変化を追うことができる。

残る中国人日本留学に関わる 6 篇は, 川崎真美論文が明治期を扱い, 孫安石論文が明治から昭和までを扱う以外は 1930 年代から 45 年までの時

期を扱っている。川崎論文は、清末に中国からの留学生派遣が開始される直前における、いわば清朝が派遣を考える契機となったとみなされている駐清公使矢野文雄の提案をめぐる日中政府双方の反応を明らかにしている。孫論文は、学校で勉強するという形ではない役所や工場での専門知識や技術を習得することを目的とした留学の実例を紹介している。あとの4篇は、1930年代から45年までの日本留学をいくつかの地域における派遣の実態から明らかにしたものであり、そのうち劉振生論文は「満州国」からの、祁建民論文は内蒙古からの派遣状況を紹介しており、川島真論文は華北、三好章論文は維新政府、ついで汪兆銘政権が置かれた南京からの派遣状況を紹介している。この4篇はいずれも、日本が「満州」から中国全土へと軍事的、外交的攻勢を強めた時期に日本側の主導下に展開された留学派遣の実態を明らかにしている点で共通するものがある。

以上論文篇に収める9篇に言及した。日本人の中国留学については、従来は個別留学生に言及した文章はいくつかあるものの、総体的な歴史の流れとして明らかにする研究がなかった点で、今回の3篇は一石を投じたことになる。また、1930年代から45年までの日本留学に関する研究が皆無に等しい状況にあったのを、今回の諸論文がそれぞれの地域からの派遣の事情を明らかにすることができた点で、本書が今後の留学生研究に与える影響は少なくないであろう。

次に資料篇について一言する。中華民国国史館「教育部留日事務档案」は、国史館に大量に所蔵されている中国人日本留学関係の原資料を表の形で要領よく紹介したものである。「同仁会と『同仁』」および「日華学会と『日華学報』」は、中国人留学生の受け入れに関わった日本側団体とそこで長年にわたって発行されていた機関誌の目次を整理して紹介したもので、全冊揃った形で保存している図書館が無い現状においては、内容を確認する点で貴重である。さらに「『留東学報』目次」は、1930年代半ば日本留学中の中国人が発行した同人誌で、日中戦争が起こる直前における留学生の問題関心を知ることができ、『中国留日同学会季刊』は、日中戦争勃発後に汪兆銘政権の周辺に

いる日本留学体験者によって組織された団体の機関誌で、『留東学報』に集まった留学生とは立場を異にして当時の日本の中国への関わりには反対しない内容で構成されている。いずれも今後この研究を進める上での貴重な資料となろう。

本書は、先に公刊した『中国人日本留学史研究の現段階』（御茶の水書房、2002年）の続編として準備されたものである。前作の不足を補い、今後の研究への問題提起となる内容を盛ることが出来たと自負している。（大里浩秋記）